

この素晴らしい世界に
色欲を

白米こそが正義

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はじめまして、《白米こそが正義》です

初めての投稿になります。どうか温かい目で見守ってください幸いです。

頻繁に投稿はできませんが、いい作品にできるようにがんばります。

初めてなので、慣れないものもありますががんばりたいと思います。

アドバイスやリクエストも受け付けております。

評価のほうはご容赦ください

それでは本編をお楽しみください

目次

ア ク ア	—	1
め ぐ み ん	—	21
ダ ク ネ ス	—	37

アクア

「ああん??んう、いきそつ??あああ??もつとお??もつとお??もつと激しつ!くうん??」

人々で賑わう城壁に囲まれた街 アクセル

時間帯が昼だからか、町の食堂は冒険者や土木工事の作業員で盛況していた。町並みは元いた世界のような高層ビルやマンションなどなく、中性のヨーロッパのようなレンガや木製の建物が多く、道路もコンクリートではなく石畳だった

その町でも一際大きくレンガ建てのちよつとした豪邸がある。その豪邸の持ち主は貴族や大商人でもない成人にもなっていないひとり冒険者だ。

そもそも『冒険者』とはモンスターの討伐や薬草や鉱石の収集、また護衛の依頼を受ける職種であり今アクセルの町で最も多く人気が高いのがこの『冒険者』だ

しかし、収入が安定することはなく、運も必要だが結局は実力でいい生活が送れるかが決まる。しかも、依頼にも難易度というものがあり難易度によって報酬も違ってくる。初心者なら簡単なジャイアントトードの討伐などお手軽なものから上級者ならダンジョンの探索やモンスターの群れを討伐などがある。

そして豪邸を丸々一軒建てるとなると莫大な金が必要になる。この豪邸の持ち主である冒険者 朝倉 快は魔法使いの上級職であるアークウィザードでさえ使えない《言霊魔法》の使い手である

ちなみに、この《言霊魔法》というのは文字通り言葉に魔力が宿り、発した言葉で相手の行動を強制することができる。レベルが上がるにつれ自然現象に干渉することもできる魔法なのだ。

この《言霊魔法》により快はあらゆる依頼を達成してきた。今では王都から王直属の近衛魔法師団への勧誘もくるほどアクセルの町でも期待値の高いアークウィザードなのだ

冒頭に戻るが、ベットで体を絡ませ激しく性交をしている男女のペア。男性の方が先程話した朝倉 快

そして彼の上にまたがり、腰を降っている女性が彼をこの世界に導いた女神 アクアなのだ。水の女神アクアとして死者の魂を導いていた彼女だったが、ある時1つの魂に出会う。それが工事中のビルが倒壊し、それに巻き込まれ亡くなってしまった朝倉 快だった。沢山の魂を導いてきたアクアはそれなりに目は肥えていたが、そのアクアから見ても快はドストライクの顔立ちだった

整った顔立ちに高校生徒は思えない色気を持ち、ツーブロの髪型に少しだらけた制服がよく似合っていた。天界でも良い男との出会いなどなく女として男に飢えていたアクアは千載一遇のチャンスだと確信した

初対面であるが、彼にさりげなくボディタッチをしたり、契約の証と嘘について彼の額にキスしたりとやりたい放題

しまいには「異世界は危険がたくさんあるから女神である私がついていっても良いわよ！」と彼を言いくるめ、後輩の天使にその後の手続きもろもろを押し付け、はれて快とこの世界に渡ってきたのだ

アクセルの町につき、ギルドにて冒険者登録を済ませ冒険者となった。最初の依頼がジャイアントトードというバカにみたいにデカイ蛙を討伐することだった。それも難

なくクリアし次々と湧いてくるジャイアントトードを屍にかえていった

ギルドで換金するがあまりの討伐数に受付嬢であるルナは自分の目を疑った。今日登録したばかりの冒険者がジャイアントトードを60体以上討伐したことをギルド内で思いつきりぶちまけてしまい、ギルドでたむろっている冒険者達に質問攻めにあつてしまう。

その日は宿で宿泊することとなったが、アクアは一睡もできなかつた。何故なら隣の快の部屋から色声が響いてくるのである。経験はないがそういう知識があるアクアは導かれるように快の部屋を覗く。そこには四つん這いになって喘いでいる女性に激しく腰を叩きつける快の姿があつた

しかもよく見れば、女性の方はギルドの受付嬢のルナだった。昼間にみた爽やかで優しい笑顔ではなく、だらしなく顔を蕩けさせ、でか乳をブランブラン揺らしながら喘いでいる。呆然と見ていたアクアだが、内心沸々と怒りが沸き上がってくる

「普通最初に犯すなら私でしょー」と的外れな怒りを目の前で欲情を発散しまくっている快にぶつけた。しかし、その直後ルナの膣内から引き抜かれた肉棒に目を奪われてしまう。血管が浮き出て子供の腕のような太さと天高く突き上げる雄々しさに小さく眩いてしまった

「エクスカリバー……」

天界にいた頃暇潰しとして下界を見渡していたときに見た神の聖剣

その名の通り、神に匹敵するほどの力を宿し、一振で大地を割、海を引き裂くともいわれている。いつだったか前に現世の王様がエクスカリバーを引き抜いたと天界が右往左往したがアクアは「すご」としか思っていないかった

だが、快の持っているエクスカリバーは本家を圧倒するほど雄々しいオーラを放ち、女神としてはどうしても見いられてしまうものがあつた

次の日、彼を人通りが少ない路地裏に呼び出し、昨日の件についての怒りをぶつけた

「まず！ 犯すなら私からでしょっ!!」

『え』

「私は女神なのよ?! この美ボディが見えないのかしら! それにこの美形! こんな良い女、周りの男どもがほうっておかないわ! それなのに貴方は! あんな乳丸出しの痴女のような格好をした卑猥な女を選んだのよ! これは反逆行為よ! どう謝罪してくれるの

かしら」

『えっと……ごめん?』

「ふむ、反省の色はあるらしいわね。いいわ、ならその証として私と、その、せつ、セツクスしなさいよお!!」

防音の障壁張っておいてよかつたとか快が思うほど彼女はバカデカイ声でとんでもないことを言い出した。

『それだけ?』

「そつ、それだけって!私の度胸にそれだけって!」

『アクアが眼中になかった訳じゃないよ。でも女神だし人間の俺とセックスしちやつて良いのかって、思ってたんだ。そういう決まりとかありそうだしさ』

「あー、そんなきまりはないわ。実際神の中でも人間と交わった奴もいて、人間と神のハーフを産んだ女神もいるのよ。だから神がセックスするのは別に縛りはないわね」

そして快はアクアの腰に手を回し抱き寄せ、アクアもノリノリで彼の首に手を回し

た。端から見れば「リア充死ね！」と言われても仕方がないほどのイチヤつきぶりである。

『そういうことなら。前々からアクアのデカイ尻犯したかったんだよね』

「そういうのを改めていわれるとちよつとはずいわね。ていうか私のお尻って大きいのか？ てつきり普通かと」

『自覚ないの？ 道歩いてるときとかめつちや左右に揺れてるよ。それにアクア、ノーパ
ンでしょ』

「そうよ／＼／神は下着は履かないのよ／＼／」

顔を赤らめ、そつぽをアクアをこれから抱けると思うと下腹部に熱が籠る。快からしてみれば、アクアはとても好みのタイプだ。グラマーではないがモデル体型で水色の艶髪と人間離れた美貌、前世でも普通の人並みに女性と体を重ねたがここまでいい女は初めてだった。

快は腰に回した手をゆっくり下に滑らせ、スカート越しにアクアの尻を撫でる。スカート越しにも関わらずアクアのもちもちの肌と手に入りきらないほどの大きな桃尻が更に快の性への思考回路を加速させた

歩くだけでユツサユツサと揺れる安産型の二つの大きな桃に劣情を感じていた快は、今からその元凶を犯せると思うと興奮で既に勃起している己の逸物が暴発しそのようなを必死に抑える

「んっ??もつと、激しくしてもいいのよ??あんっ??あら、快のここすっごおしい?」

アクアは手で快の下腹部のもっこりとした小山を撫でた。それは、少しづつ膨れ上がる。アクアの細い指が快のちんぼの裏筋を焦らすように撫でることで、さらに興奮が高まる

そして彼女はゆっくり彼のズボンのジツパーを下ろし、ボクサーパンツを下ろした途端、アクアの頬を昨夜しつかりと目に焼き付けた快の肉棒がバチンツと叩いた。アクアはそれをゆっくりと握る。それはとても温かくごっごっしており、そこから漂う淫臭はアクアの子宮をキュンキュンさせれるには充分すぎるほどだった。

「はあ??これよ、これがずっと欲しくてウズウズしてたのよお??あむっちゆる??んああ、ほおいひい??んっ、んっんろっちゅ??」

「んっ??んっ??ああ、ゲエツプ??もう、出しすぎい??でも、おいし??」

指に纏わりついた精液をしゃぶり舐めとる姿が扇情的でさつきだしたばかりなのに、すでにバキバキに回復していた。すると、それを見かねたアクアは壁に手をつき、尻を強調するポーズをとる。スカートからはみ出た大きな尻は今にもむしゃぶりつきたいほどプリプリに実っており、中央には肉厚の陰口がパクパクしている

「今度はあく、私も気持ちよくしてえ??」

ホントにホントにこの女神は処女神なのだろうか。妖艶な笑みをうかべながらこちらを誘ってくる女神が処女神なわけがない。さきほどのフェラも初心者とは思えないテクニクだった。仮に処女神だったとしてもアクアにそういう才能があったのなら納得がいく。それも天性の才能だ。これからは水の女神ではなく淫の痴女神と名乗るべきだろう

『レルツ』

「あっ??」

『じゆるっ…… あむっ…… ちゅっあむあむ…… れちゅっ…… んんっ……』

「あゝっ??おゝおゝおゝおゝ??んっ、いきそっおお??ひゃっ??甘噛みだめっ??くひいつ??いくっ??いくいくうああああああああ??」

アクアにも負けないテクニックでアクアをいかせる。アクアの巨尻を自身の唾液でコーティングし、吹き出たアクアの愛液が石畳に染み込んでいく

アクアはあまりの快楽に脱力してしまうが、いぜん彼女のデカ尻は突き上げられたままなため誘っているにしか思えない。荒い息づかいで体が揺れるため目の前のデカ尻は上下にユラユラ揺れている

『いいよね?アクア、犯しても』

「ふえ?ちよ、ちよつと待って!まだいくのが止まって……」

『ふんっ!』

「アヒイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ」

????????????????

快の巨根がアクアの淫口に挿入されただけでアクアの体は今まで感じたことのない
 快楽が迸る。アクアの膣内はとても温かく、巨根の快にはギチギチにしまっていた。

『くっ！めっちゃしまってるよアクア！』

「あ、あ、あ、あ、これヤバイ??? ヤバしゆぎ??? いきゆ??? すぎゆいつぢやうよ???」
 ”?????”

パンツ パンツ パンツ パンツ パンツ

気持ちのいい乾いた音が誰もいない路地裏に広がる。アクアの膣内は彼女の愛液で
 トロトロに仕上がっており、きつついマンコの潤滑油の役割を果たしているおかげか二
 人の脳内はさらに蕩けていく

既に交尾をすることしか能がない性の獣と化した二人は激しく互いを求めあった

『やばっ！これ名器過ぎ！』

パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！パンツ！

ピストンを更に加速させ、アクアの精神を蝕んでいく。徐々に削られていく残りの理性は今にも快樂に墮ちてしまうほど小さいものでアクアの快樂墮ち間近を告げている

「あ”あ” ああああ?????? 早くしちや、らめつ???? これつ、しにゆう???? しんじやうう????」

『くあつ! こんな? とになるなら、初めつからアクアを犯しでればよかつたあ! 何だ、この名器はつ』

快の突きはさらに力強く、そして疾くなっていく。アクアは何度もアクメをきめるが、押し寄せる快樂に自我が飲み込まれてしまわないよう、必死に己を保っていた

『つそろそろいくよっ』

「きてつ! きてつ! 快のおちんぼミルク ほしいのお」

『あ” あ!!』

??????
????????
????????

その瞬間、快の中から解き放たれた精液がアクアの子宮に解き放たれた。必死に耐えていた彼女もあまりの快樂にととう負けてしまい、女神自分だった頃とはうってかわ

りただ肉欲にふける雌と成り下がったのだった

「あ?? お?? これしゅごいい……………
 ”お??” おっ??
 きい???? もつと、欲しい……………
 ?????? たねじゅけしえつくしゅ……………
 ?????? しゅ
 ??????”

それにより、快の中で何かがきれ、倒れ伏すアクアを持ち上げて、自身の部屋に連れ込み3日間に及ぶ大運動会が開かれた。3日間アクアはイキ続けた。何度も膣内に射精され、体も開発されアクアの脳内は魔王討伐からセックス一色に塗り替えられた

気の合う仲間として、新たにめぐみんとダクネスも加わり、快の”肉便器”としてハーレムが完成したのだった

そして毎日のように肉欲にふけていった。今では毎日セックス漬けの効果であろうか、彼女の体は益々発達していき、Cカップだったアクアの美乳は、あつという間にFカップにランクアップさせられ、母乳も出るように改良させられた。艶のあるもちもちの尻も、巨尻を通り越して爆尻に成長。今ではスカートからはみ出て、町の男共から視姦される始末だ

当然彼女の衣服も入らなくなってしまい、仕立て屋に頼みオーダーメイドの服を作ってもらうしかなく、最近では快の希望から下着もつけるようになった

しかし、下着のサイズも2週間に1度新調しなければならぬ。バストサイズもみるみる成長していきもう3桁間近となってしまうほど大きくなっている

今では三人で1週間ずつ夜の相手を担っている。月・火がめぐみん、水・木がアクア、金・土がダクネス、そして日曜日は皆で仲良く4P

時々、めぐみんの幼馴染みであるゆんゆんやアンデットのウイズ、ギルド受付嬢のルナなども参加するが基本この三人で回している

そして、今日は水曜日

2日ぶりにアクアが当番なのだ

『今日はっ！一段と激しく求めるじゃないか、アクア』

「当たり前でしょお???くひっ??快のギバキ極太鬼畜雄おちんぼとオールナイトセックス???久しぶりなんだからあ” ああ?????”」

夜相手するだけで昼間はやらないわけではない。しかも、朝昼晩関係なく彼らは盛つ

ている。しかし、彼女達にとって夜の性行為は特別であり、唯一彼を独占できる時間なのだ

「欲しい??欲しいよお??快の孕ませ液??ああん??だあ・かあ・らあん??もつと快の肉棒で、ドスケベ淫乱肉便器女神のぐちよぐちよおまんこ蹂躪してえ〜っ
?????」

『了解っ!!!』

パンっ!!!

「っ
!!??????」

パンっ!!パンっ!!パンっ!!パンっ!!パンっ!!

「お”ほおおおおっ??これっこれえっ??あれがっ、欲しかったのよお
?????うう〜ん快のバキバキちんぽ最っ高
?????」
?????うひっ
?????はあっ

ブリユルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル

「イッ
ツ

ギユウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
くっ
」

!!!!?????????????

大量の精液がアクアの膣内を満たしていく

たった一回の射精でビールジョッキ一杯分の量

常人じゃ考えられない程の量にアクアを初め、何人もの女性がこれに墮ちていった

しかも、彼の精液には媚薬効果もあるのだ。もし、一度でも彼の精液に振れた瞬間から『快樂墮ち』ルートまっしぐらである

そして今夜、アクアの膈内には10杯分もの精液がおさめられている。ぷつくりと膨れたお腹を擦りながら、彼女の唇にチュツと優しく口付けをした

ゆつくりと膈内から彼のイチモツを抜かれることさえも、極上の快樂に感じるほど、アクアの思考は蕩けきっていた

「お お お お っ
??????
ヤバイい??ん っ
ん???
気持ちいいがとまんやいい
??????????」

アへ顔晒しながら、ベッドの上で脱力する彼女の唇にそっと口付けをする

『ほら、まだ時間はたっぷりある。ハードセックスするんでしょ？お得意のおねだりしてみせてよ』

虚ろだった目がゆっくり焦点があい、瞳がハートマークになった

「アクアはあ??卑しくも朝倉 快様のお??ドスケベ淫乱女神肉便器ですう??快様のお、鬼畜極太おちんぼ様でえ??もつとじゅぼじゅぼしてえ??」

彼らの夜は始まったばかりである

めぐみん

「ふう…：…ふう…：…んおお”お” おおつ…：…：…
 ????”

ベッドに仰向けでピクピク痙攣するアクア

彼女の秘部からは快の精液がドロツと逆流している。昨晩からずっと休む暇もなく絶頂していた。今彼女はアへ顔晒ながら、止まることのない快楽の余韻に浸っているところだろう

快は一旦休憩をと下の台所までおり、コップに水をくむ。それを流し込むとひんやり冷えている水が喉の渴きを潤していく

その時、不意に扉が開いた。台所に入ってきた張本人は赤い瞳に黒髪でサイドが長めのショートヘア。暗闇でもわかる可愛い童顔はちよつと不満げだった

「快、起きていたんですか？」

『うん。喉が渴いてね。めぐみんは？』

「私は眠れなくて」

めぐみんはペタペタと此方まで歩き蛇口から水をくむ。そしてグイツと飲み干すと、快に寄りかかってきた

「随分激しかったみたいですね。私の部屋まで聞こえてきました」

『なら、次からは音漏れの対策をしておくとするよ』

「みてください。貴方達の交尾のせいで私のショーツグショグショです」

めぐみんはパジャマをまくり、濡れた黒色のショーツをみせる。湿気に濡れたパンツは水分を含んだようにしっとりとしていて、パジャマにまで及んでいた

「本当にこのおちんぽは、一体何人の女性を泣かせてきたんでしょうねえ？」

めぐみんの小さな手が快の肉棒を弄ぶようにしごく。細い指でカリを刺激したり、裏スジを絶妙な力加減で撫でてくる。先程まで萎えていたイチモツが既にピンピンに回復する

「おや？もう回復したようですね。ほら、ビインビイン??どうです？今夜アクアはもう無理のようですし、ここからは私がお相手するというのは」

舌嘗めずりしながら、快のイチモツをしごく姿は小悪魔そのもの。めぐみんの提案に考える余地など快にはなかった

『いいよ。めぐみんの部屋に行こうか』

「いえ、それでは時間が勿体ないです。ここでやりましょう」

『僕はいいいけどさ、ペナルティーを受けるのはめぐみんだよ?』

この屋敷には様々なルールがあり、それを破るとペナルティーが発生する。例えば、掃除をサボると尻叩き30回だとか、無駄遣いをするると2時間バイブを啜えて放置プレイなど

ペナルティーは主に性の罰ゲームのようなものだが、夜伽の権限を奪ったり、権利者に断らずに快と交えることは最も重いペナルティーがかせられる

3日間性行為禁止

これは彼女達にとって最も辛い罰だろう。すでにちんぽ中毒者となってしまうと1日1回セックスしなければ落ち着かないほど彼女達には性行為は私生活にはかせないものとなっていた

一度アクアがダクネスとのセックスの最中に乱入したことで3日間の性行為禁止令が適用されたことがあった

それから3日間、アクアはセックスに飢えていた。疼く体を鎮めるように、己の体を抱きしめ必死に耐えていた。それをいいことにめぐみんやダクネスはやりたい放題。アクアの目の前で激しくディープキスをしたり、堂々とリビングで3Pするなど、アクアに見せつけるように盛っていた

禁止令が解除された翌日、アクアと快は彼女の部屋に閉じ籠り4日間永遠とセックスし続けていた。アクアは飢えた肉食獣のような目付きで快楽を貪り、さすがの快もここまで野獣化するとは思ってもおらず、4日間アクアに精液を搾り取られることとなった

「心配ありません。二人が起きてくるまでに証拠を隠滅しておけば大丈夫です」

『そう?ならいいけど、んむっ』

「んんっ?..??ちゅっ??:..: ぷはっ??:..: お喋りはここまで。時間も惜しいです。早くやりましたよ」

めぐみんは来ていたパジャマを素早く脱ぐ。控えめな胸と尻は彼女が未だ穢れを知らないと告げているようにみえるが、それとは正反対にムチムチに肉のつた太ももは男を誘惑する魔性の果実とかしていた

彼女の体からは火照っているのか蒸気がのぼり、彼女の愛用する黒のショーツからはチヨロリと愛液が太ももに流れ落ちている

「さあ??エロの道を極めましょう?」

(変わったなあ.....)

この変わったというのは、もちろん良い意味でだ

初めて会った時は、快とアクアのセックスを顔を赤らめながら見ていたし、ことあるごとに「不潔です!」「不埒です!」と快に説教をしていたことが懐かしく思える

めぐみんと会ったのは、この世界に渡って一ヶ月が過ぎた頃だった。まともな収入も入り、生活も安定してきた時にギルドでパーティーメンバーに入れて欲しいとたずねてきたのだ

『何の魔法が使えるの?』

「よく聞いてくれました!!我が名はめぐみん!紅魔族一のアークウイザードにして最強の攻撃魔法爆裂魔法を操る者!」

中二病じみた挨拶がアクアは気に入ったようで、是非とも仲間にいれようと言ってきた。中二病は置いといてめぐみん自身かなりの美少女だったため、ひとまず爆裂魔法を見てから決めることにしたのだ

広野で実際に爆裂魔法を撃たせた。長い詠唱から突如巨大な大爆発が起こる。それによって大地は抉れ、熱風が吹き荒れ、空には巨大な茸雲。ちよつとした核爆発をみた気分だった

しかし、それ以上に理解できなかったのがめぐみんがうつ伏せに倒れていることだった。無防備な姿で倒れているせいで、スカートから黒色のショーツが顔をだしている。中学生のような顔立ちなのに随分大人のはく下着を身に付けていることに興奮してしまい、アクアにご奉仕しておさめてもらうことにした

「じゅぶじゅぶつ???んちゅつ……んんく、んぶつ??もう、こんなにたたせて、妬けちゃうわ??」

「アクア?快?何をしているんですか?私魔力が底を尽きていて、立てないんです」

アクアと快は顔を見合せ、アイコンタクトで会話する。アクアから「やっちゃって!」とGOサインがでたため、快は萎えたちんぽを元通りにし、めぐみんの美尻に押し当てた

「ひやつ!なつ、何ですか?この、ゴツゴツした棒状のものは」

「めぐみん、それは快特製のポーションが入った筒よ」

「ポーション?なるほど!それでは飲ませてください」

『残念ながら、これは飲むようじゃないんだ』

「へ?ではどうやって回復するんです?」

『まあ、任せといて』

そういつて、快はめぐみんのパンツをずらし彼女の秘部を露にする。小さな唇がクパクパ動き、ちょこんと茶色い毛が密集している。そこから香る淫臭はまるでオレンジのようにフルーティーだった。到底入るとは思えない秘部にゆつくりと挿し込んでいく

「あゝ??か、快!?!一体何を!痛っ!」

めぐみんの秘部からは赤い鮮血が垂れる。

「どう快、めぐみんの中は」

『すっごい絞まっているっ。でもこれ、突いたらめぐみん壊れるんじゃない?』

「んゝ、物は試しについてみたら?」

『うん、よい、しよっ!』

応なのかパーティーの中でも最多で、暇さえあればセックスばかりしている。爆裂道を極めるよりもエロ道を極めることにいそしんでいるのだ

最近ではダグネスを調教することにはまっており、めぐみん自身もDSになり、快とのセックスでもSMプレイを取り込むほどだ

「はふっ、ちゆる??んもっんも??んっんっ、んくくちゅっ??随分余裕ですね。そのままだと、私のテクニックで快の精液搾り尽くしますよ?」

『また、腕を上げたね』

「当たり前です。週に6回サキュバス達から直々に指導してもらってるんですから。この技もサキュバス直伝なんですよ?」

めぐみんは快のちんぼの亀頭を握りしめ、圧迫された亀頭をペロペロと舐める。圧迫されているからか感覚が敏感になり、あつという間に射精してしまう

めぐみんは精液でベトベトになった指を艶っぽく舐めとる。指をしゃぶったり、舌で奉仕するように舐めとったりなど。しかも目線は快に合わせているのだから、興奮しないわけがない

「あん??そんなビキビキに興奮させてえ、怖あゝい??」

『入れるよ』

「しようがないですねえ。いいですよきてください。私を

ブチ犯して」

快はズププと入っていた巨根をめぐみんの子宮に押し付けた。少し成長したとはいえ、膣内のしまりは変わっておらず欲望のまま愛しの人の孕ませ液を搾り取ろうとしてくる

「ああ??気持ち、いいですか??ああつ、あつ??快つ、キス、キスしてえ??」

必死に喘ぎながらキスをねだる姿がどうしようもなく愛おしく見え、めぐみんの唇に触れるだけのキスをするがめぐみんがして欲しいのはその程度ではなかった

「違います！もつと、激しくっ??あへっ??はあはあ??…： デイブにつ???”」

めぐみんのおねだりに小さな口を貪るように食らいつく。舌で歯茎をなぞり、小さな舌を絡める。めぐみんは快の舌を「じゅぞぞぞつ」と下品な音をたててしゃぶる。流し込んだ唾液をコクツ、コクツと飲み干していく。腰を振りながら三分間の濃厚なキスが終わり口を話すと快とめぐみんの間に唾液の架け橋がかかる

そこから快は有り余った性欲をめぐみんにぶつけた。アクアで解消しきれなかった性欲をめぐみんの小さな身体で発散する。何度も射精した。彼女の口に、顔に、膣に
夜空がだんだん明るくなっても彼らの性交は止まらない。もはや彼らの体は精液なのか汗なのかすらわからないほどベトベトになっていた。しかし、それでも腰が止まることはない

長い時間の果てにようやく彼らの性交もラストスパートに突入した

『めぐみんっ、出すよっ、ああヤバイっ、つきそう…：…』

っ
『!!!』

「ああ??あ、お、おおっ??私も??いぎますう??いつ、いつしよにいく??」

『お、お、おっ!』

デュルルルルルルルルルルルル

「あはああああああああんっ

?????????
」

朝の日差しが全身白濁液まみれのめぐみんを照らす

その後ソファに座り、息を整える。さて証拠隠滅しようとするがドツと疲れが身体にのし掛かる。あまりに夢中になり今まで気付かなかった眠気も一緒になってやってきた。二人はその後の事も考えず眠りについた。

その後起きてきたアクアとダクネスに見つかり

案の定めぐみんはセックス禁止3日間を言い渡された。アクアは拗ねてしまい、1日デートに費やし、それから2日間アクアの自室でラブコールをして機嫌取りするはめとなった

ダクネス

朝倉 快の朝は早い

日が顔を出し始める時間帯に目を覚まし、ベットから身をおこす。一昨日の夜から相手をしていたアクアを見るが気持ちよく寝ていた。機嫌を損なわせてしまい、機嫌取りに2日も費やしてしまった。口上では素直じゃない彼女だが、セックスに入るとはたちまち甘えん坊になりやすい質なのだ。そこに付け入り耳元でラブコールをしていると自ずと反応してくれるのだからずっと見ていられる。彼女は昨夜の牛のコスチュームを着たまますやすやすや眠っていた。牛コスの前にはナース服や学生服を着せイチャラブセックスしたり、わざとサイズが小さい水着を着させ、湯船の中で精液漬けにしてやつたり、2日間ぶつ通しでアクアを犯しまくった。牛柄のビキニをずらしぷっくり膨れた紅い乳輪に少し埋もれた先端の突起を吸い出すようにチャプチャプと音をたてながら吸い、時には苛烈を極めるように激しく吸ったり、飴玉のように舌の上で転がしながら母乳を搾ったりなどしてアクアの胸を弄んでいた

「ひやつ??んんん??はあっ??んふっ??っんう??あんっ??」

ちよつと甘噛みするだけで朝一番搾りの母乳が洪水のように噴き出てくる。のど越しの良いほんのりとした甘さと芳香な匂いが鼻腔に透き通る。さすがは水の女神だと褒めるようにもう反対の胸をさわさわと優しく撫でる

しばらく母乳を飲んでいると、コンツコンツとノック音とともにドアが開く

そこには黄金に輝く金髪と天女のような美貌。そして何よりアメリカ人もびっくりなダイナマイトボディ。おそらく元の世界でもモデルにもAV女優にここまでトップクラスの女はいないだろう

『おはよう、ダクネス』

「ああ、おはよう快、いいやご主人様??」

ダクネスははつきり言えばドMだ

美女の要素を全て持ち合わせていて他の男共が黙っていないはずが、この異常性癖が全てを台無しにしていた

彼女が快のパーティーに入ったのも実力云々ではなく単純に野生の勘ならぬドMの勘というやつだった

こいつこそが私のご主人様となる存在だ

ダクネスの直感に正しかったとっていいだろう

パーティーに入ってから一日で彼女は性奴隷として調教をうけた。屋敷の地下にあるセックスルームに連れてこられ、亀甲縛りで吊し上げられ、鞭や蠟燭、三角木馬等々の陵辱によってダクネスの飢えていたドMの本能が満たされていく

「くっ??誇り高き騎士として、私は屈しなっアヒツ??」
『躡る必要があるな』

1時間後

「はあ??はあ??おいつ、いつまでこの格好でっ??ああっ!紐がっ!股にいつ??あ
ああん??」

『うわっ、マン汁ドバドバ出てくる。そんなに感じてたんだ』

「しよっ、しよんなことお??あるはずない??」

『説得力ないんだよ。この変態』

「あっ??」

2 時間後

「くっ?? オーク級のちんぽで私を陵辱する気か!? そうなんだな!? 私をそのちんぽで孕ませ、笑い者にするきだろ!」

『俺のチンポが欲しいなら、それなりに”おねだり”してみせてよ』

「なっ!”おねだり”だと!?! この私が貴様のオチンポに媚びろというのか! そんなこと、断じておことわりいっつ???’」

『電マ上げただけで絶頂つて、どんだけ胸弱いんだよ』

「ひ、卑怯者お???’ 私はっ???’ 屈しないいん???’?’」

4 時間後

「お お お お??もっ、らめっ??ほっ、おいっやるなら早くやれえ?」

『は?何を?』

「だっ、だからあん??貴様のお、オチンポっつく??でえ、私をつりよ、陵辱う???」

『いや、やるならダクネスがおねだりしてからって言ったよね?それにアクアとめぐみんが奉仕してくれるからいいし』

「なっ!？」

ダグネスの目の前に広がるのは、ソファでくつろぐ快の肉棒に群がるバニー姿のアクアと猫耳を着けたためぐみん達の姿だった。彼女らが恍惚した顔で快の血管が浮き出たバッキバキのちんぽをひっしに舐めている姿は、今日新たな仲間として親睦を深めた仲間達の姿とは全く異なっている

彼女達はピンク色の吐息を吐きながらも彼の体にキスの雨をふらせる。彼女達の股の部分だけハート型にくり貫かれており、そこからは彼の精液が溢れ出ていた

「ちんぽおっ??ちんぽおっ??」

「はふっ??んちゅっ??れろっ??ちゅっ??」

「快っ!アクア達に何をしたっ」

『別に。ただの雌にしてあげただけさ』

アクアとめぐみんはとろんとした目をダクネスにむけた。ぎよつとするほど顔は蕩けきっており、瞳の中にはハートマークがうかがえるほど淫欲に溺れていることが丸わかりだった

「あらあ??ダクネスったら、まだ意地をはっているのお?早く堕ちたらいいのにい??意地なんてはっていても、なんの意味もないわよ?」

「そのとおりです??快の肉槍は一突で絶頂してしまうほど、すばらしいですよ??私たちと一緒にエロ道を極めましょう?」

そう言い、二人は縄をきり両手を拘束したままダクネスをベッドに仰向けに寝かせ、ゆつくりの彼女の股を開いた。ダクネスの淫口からはだらだらと愛液が垂れ流れており、ちよこんとはえている黄金の陰毛は自身の愛液で濡れている。ダクネスはあまりの羞恥心に顔を赤らめているが、口元は嬉しいのか緩みきっており、わずかによだれが垂れている

「ふつ、二人とも！何をっ??そ、そうか。今から三人で私を陵辱しようというのだな！」
『いいね、いいね。そういうの嫌いじゃないよ。今からダグネスを従順なペットに変えてあげよう』

ゆつくり己の巨根をダクネスの淫口に挿入していく

「あっ??これヤバアっ??はあっはあっ??ううくん??ああ” あっ??」

まだ半分しか入っていないのにこれだ。ゆつくり進行していく巨根はゆつくりと、確実にダクネスの中を犯していく。焦らされているように感じ、ダクネスは挑発する

「はっ！所詮はっ、んん??口だけはっ、かあ??じえっ、じえんじえんん??っはあ??気持ちよくなんてええ??にやい！」

『あっそ』

快は腰を引き、思いつき叩きつけた

快の剛直な巨根はダグネスの膣内のあらゆる箇所を刺激し、体に絶大な快楽を与え
る。ダグネスは今まで味わったことのない快楽に彼女の心は陶醉したように溶け、麻薬
のようにそれを欲した

「何これ??しらにやいつ??こんにゃのお、はじめてえ??ああんっ??もつと、欲しいっ??」

彼女自身が腰を突き動かし、自分から快楽を望んだ。バチユツバチユツと音をたて、
結合部からは彼女の愛液を其処ら中に撒き散らす

「あっ??イツ、た??イツた??イツたからああん??もう、とめてえ??とめてよお??あひっ??
これっ、いじょうはあ、お」がじくなるう??」

ダクネスは絶頂しても、快はまだ満足していない。ダクネスがいき続けても快の攻め
は続く。すなわち快が満足しなければダクネスは永遠と攻められるのだ。SMでもこ
こまで拷問じみた攻めは体験したことがなかったダクネスは必死に抵抗する。逃れよ
うとシートにしがみつき、アへって脱力しっぱなしの体に鞭を打って動かす

だが、目の前に現れた獲物を見逃すほど、快も甘くない。手首をベッドの柵に縛り、下

半身をアクアらに抑えてもらう。これでダクネスの退路は完全に封鎖されてしまったのだ。

『さて、続きだ』

「待てっ、つやめろお??? これ以上はっあ” あ” ああああっ????? またっ、おおきくうんもっ、むりい?????」

快の両手がダクネスの豊満な乳房を揉みしだく。アクアとはまた違う柔らかさで、手にしつとり馴染み、何時間揉んでも飽きがくることはないだろう。お嬢様のように育てられた箱入りの巨乳はスベスベの肌にもっちりとした触り心地。そんなロイヤルな胸を快は搾乳するかのよう揉む。当然乳がでるはずないが、貴族の娘の胸を搾乳していると思うだけで、両者の興奮は更に高まる

「んあっ??? そんなっ、ずるいぞお?????? わたしの、おっぱい????? ミルクでないのにい?????? たまらん!!?????」

一気に押し寄せた快樂の波がダクネスを飲み込んでいく。快の精液の大波はダクネスの子宮を埋め尽くしていった。そして、ダクネスは彼からの寵愛の証を受け取り、幸せを噛み締めながら瞳を閉じていった。この日からパーティーの盾・囹役兼ペットが仲間入りをはたした

その日を境にダクネスはアクアやめぐみんのいるときは通常通り接し、二人きりのときに彼女のDMの欲望を解放させた。彼が「セックスしたい」と言えば喜んで相手をし、彼が「おっぱい揉みたい」と言えば自ら乳を差し出す。これがダクネスが求める最高の幸せなのだ。そしてダクネスはもっとペットらしい行いがしたいと思うようになった

それが、お散歩

毎朝早起きし、ご主人様と共に早朝のアクセルの街を徘徊する。そして最後は裏路地にて交尾をする。気絶するまで犯され、服を剥がされ、裸のまま放置

気がつく、既に表では人々が交通しているのだ。快は他の同性に自分の女の裸をみられることをひどく嫌う。そのためダクネスは誰にも己の裸を見られてはいけないことを大前提に戻らなければならない。もしも、誰かに見られてしまえばと思うとゾクゾクする。その場で押し倒されレイプされてしまうのか、はたまたゴミ虫をみるような眼を向けられてしまうのか…

そして戻れば快のお仕置きが待っている。尻叩き100発の一発一発に快の独占欲という愛が籠っている。その事を噛み締めながら100発の愛を体に叩き込まれる

時々、アクアが羨ましそうに見ているのが傍目に見えるので「自分と同族か?」と思っているが、尻が性感帯なアクアなため尻叩きは大好物なのだから、DMかといえば微妙なラインだ

冒頭に戻るが、今日も早朝のアクセルの街を首輪をつけながらダクネスが四つん這いで歩く。リードで導かれながら薄暗い路地裏へと赴く

梅雨明けだからかはじめじめとした路地裏はセックスする環境としては良いとはいえない。しかし、ダクネスは快のペット。「お前はこんな場所で十分だ」と言われているみたいで気が昂る

『尻をこつちに向ける』

「はっ、はいい?」

アクアがオールラウンダー型、めぐみんは技術特化型、だとすればダクネスは欧米のように抜群のプロモーションを誇るダイナマイトボディ型だろう

向けられた大きな淫尻の谷間からはダクネスの愛液が滴っている。ダクネスは発情した犬のように息が荒々しくなり、尻を左右に揺らしている

『ペットの分際で煽っているのか?』

「い、いえっそんなことは??ご主人様の肌を直に味わいとうございます??」

快は黙ったまま片手を振り上げた。振り上げた手を思いつきりダクネスの巨尻へ振り下ろす

パンっ!!

「あふん??」

乾いた音が路地裏に木霊する。ダグネスの巨尻には快の手形がくつきり赤くついていた。攻め立てるようにダクネスの尻を叩く。一発叩く毎にダグネスの股からは愛液が噴射される。40回程叩かれるとダクネスは腰が抜けたのか、地面に座り込んでしまった

『立って、ダグネス』

「おっふ…
?????
ご主人様は鬼畜だな
?????
んっ
????」

立った方がいいがダグネスの脚は依然として震えたまま。まるで生まれたての小鹿を連想させる。だが、身体は正直で、淫口からは愛液が垂れている

快はズボンから例のイチモツを取り出すと、ダクネスの尻を叩いた

「ひうんっ??」

『おい、犬。どこに入れて欲しい?ここかな、それともここかな』

「お??じゅるいいい????
ごしゅっ、ご主人様あ????
いじりわりゅう????
しよんなのっ、決まっ
てるによいっ????」

りの気持ちよさに失神。絶頂の余韻とともに気を失っていく

その後快がダグネスの服を剥ぎ取り、裸のまま路地裏に放置する。これが朝のルーティーンであり、必死に戻ってきたダクネスを玄関口でまた犯すのもこれに含まれている

快は屋敷に戻りながら、アクアとめぐみんを可愛がりながらダクネスの帰りを待つのだった